

深江物語（8）

唱歌「春の小川」「故郷」を 思わせる風景

深江塾 森 口 健一



図

昭和三十年代初めの頃まで、神楽町（現在の深江南町一丁目）の北端の一角に唱歌の「春の小川」を思わせる水路があった。現在の深江南町一丁目の北端が国道43号に接する面積九五四三平方尺の田畠の中と、その周囲を流れる二つの水路である。国道43号は当時旧国道あるいは新道と呼ばれていた。敷地は、西は津知川に接し、東と南はそれぞれ地域の生活道路に面し、西半分が水田で東半分が畠であった。

水路の一つは概ね水田と畠を二分するよう敷地の中央を南北に流れ、もう一つは、畠の東端を北から南に流れ、敷地の南東角で西に向かい中央を流れる水路とひとつになって、田畠全体の西南角で津知川に合流する。

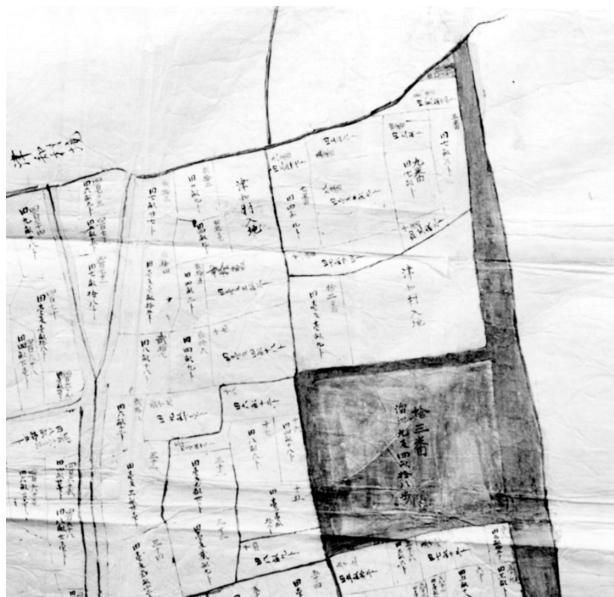
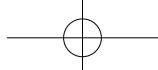


写真1 明治9年の地積図に描かれた皿池
「溜池」とだけ記載（神戸市立博物館蔵）

これら水路の源は阪神電車線路の北にある当時「皿池（さらいけ）」と呼ばれたため池である。明治九年（一八七六）の「深江村地籍図」（神戸市立博物館蔵）では「溜池 九反四畝拾八歩」とある。そのため、これらの水路は一年中涸れることはなかった。皿池から流れ出た水は、阪神電車の線路と国道を潜って神楽町の田畠の灌漑用水路となる。津知川に合流するまでの水路の幅は一尺から三尺。水深は三十センチから五十センチ。底は大人の足首に入るほどの泥で、泥の底は砂地である。流れは大雨のとき以外は穏やかで、めだかの群れがゆっくりと流れに逆らって泳いでも流されることはない。水路の岸は全て土で固められている。岸は大人一人が歩けるほどの幅がある。いわゆる「あぜ道」



である。中央の水路の中ほど、敷地全体の真中あたりに田畠作業用の道具を入れる小屋のような造作物があつた（表紙写真）。

当時これらの水路は初夏から秋口にかけては、子どもたちの格好の遊び場であった。水田に水が張られ稲が植えられた頃、子どもたちは「川へ行こう」と連れ立って魚取り用の網と、アルミ製洗面器や小さなバケツを持つて「川」へ向かう。言うまでもなく「川」とは水路のことである。「川」にはありとあらゆる水にすむ生き物がいた。水路の延長が二つを合わせても一〇〇㍍ばかりしかないので、種類は豊富でも数は少なかった。メダカ、ハゼ、フナ、ナマズ、ドジョウなどの魚たち。いずれの魚たちも一〇㍍を越えるものはいなかった。ゲンゴロウ、ミズスマシ、ミズカマキリ、さまざまなトンボの幼虫のヤゴ。そして水の中に入る子供の足に吸い付いて血を吸う嫌われ者のヒル。ヒルにくつつかれてあわてて土手に上ると、トカゲ、カエル、ヘビがいた。西の水田の上にはギンヤンマが稲の緑の上を行ったりきたりしている。東の畑の上にはモンシロチョウなどの小型のチョウが飛び交っている。また現在の深江北町二丁目を南北に通つて阪神電車線路敷までの道を栄通という。栄通に沿つて南北に流れる名前のついていない幅一㍍ばかりの水路があつた。旧森市場の西の道を南に下り北から旧栄通一丁目・四丁目の道路沿いの東側にあった。ここにザリガニが生息していた。昭和三十年代、深江の水辺でザリガニがいた唯一の場所であったという。

都市化が進み、現在の深江にあつた田や畑が公営住宅をはじめ多くの住宅のために宅地化された中で、ここの一時は最後まで子どもたちにとっての自然の宝庫であった。

高層の市営住宅

子どもたちにとっての自然の宝庫であった「川」のある田畠は、昭和四十年代に入るとその姿を消した。この土地は、永らく敷地の東隣

に住む岡田氏の所有地であつた。岡田氏はこれらの敷地の田畠を小作に出していた。昭和四十七年三月、所有者は伊藤忠商事株式会社に変わり、

昭和五十年一月には神戸市に所有権が移つた。神戸市は同年十二月に、市営住宅の建築を開始、昭和五十二年十一月完成、「深江南住宅」と名付けられた。

当該住宅について神戸市のパンフレットには、「当住宅は、国道43号線の南側に面しており、その騒音対策として14階建棟を国道に並行させて南側8階建棟の防音壁とした」

「当住宅は、現在の地方自治体が住宅建設にあたつてかかえている問題点（自動車騒音、風害、プライバシー、電波障害等）が集中しているが、いずれにも細心の注意を払つたモデル団地として、昭和53年7月建設大臣表彰を受けた」と記載している。

深江南住宅

東灘・10

所在地	東灘区深江南町1丁目
敷地面積	9,543.00m ²
戸 数	275戸 階数8.14
工 期	50.12~52.11
建ベイ率	19%
容 構 率	196%



写真2 市営深江南住宅のパンフレット

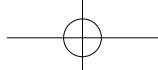


写真3 市営深江南住宅予定地（南側から）



写真4 市営深江南住宅予定地（西側から）



写真5 市営深江南住宅予定地（北側から）

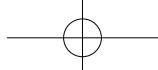
地に対し、住宅戸数は二七五戸である。高層住宅化したため建ぺい率は一九%、容積率は一九六%で敷地には結構な空間ができた。二つの建物の間にできた広場では、平成十年頃まではさまざまな行事、特に夏休みには毎朝ラジオ体操が行われていた。深江には深江本町や北町に市営、県営の住宅が多く建てられたが、エレベーターつきのこのような高層住宅は初めてであった。

昨今、この公営住宅の改修の話がちらほらと聞かれる。筆者の個人的な意見ではあるが、容積率を考慮しながらも残された空間を利用して「緊急避難および緊急用物資保管のための公共構築物」を検討して

ほしいものである。ついこの間までは地震や津波対策のことが緊急事態対策であったが、今日では空からの危機も考慮に入れる必要がある。このことは何も特異なことではなく、イスラエルでは「民間防衛」という名のもとにそのような対策がとられている。深江南地区には公営の住宅はここしかなく、昨今の情勢を鑑みるとき、この高層住宅を地域の安全という観点から大胆な政策を望みたい。

「川」の源の池

「春の小川」を思い出させる水路の源は、阪神電車線路北側、芦屋市に近いところにある池である。いま、「宝島池公園」となっている。



この池は、名前が時代と共に変わっている。

戦前から深江に住む人は今でも「皿池」という。昭和五十五年ごろに岡田龍太郎氏が作成した手書き地図では「皿池」と表示されている。昭和四十二年に発行された地図では「白井池」となっている。また図1の地図では敷地の東半分が「白井池」で、西半分は埋め立てられた「宝島池公園」となっている。平成二十七年の神戸市建設局の台帳には公園名「宝島池公園」と表示されカタカナでは「ホウトウイケ」となっている（写真6）。

この池の面積や所有権の変化を調べてみた。

昭和二十二年一月の「深江区有財産目録」（深江財産区文書）には地目「溜池」、字名「永井町四丁目三」、面積「九反一畝」、付記として「下池水面堤防共」と記載されている。所有者については、昭和三十五年一月に所有者「神戸市東灘区本庄町深江」の名で所有権保存登記がなされ、同日付で所有権は神戸市に移転された。移転原因は「買収」によるものである。面積は六一五三平方メートルである。要するに古くから深江村の溜池であった「皿池」は深江地区の田畠を潤していたが、戦後になって住宅地となって田畠がなくなり、昭和三十五年には溜池としての役割を終えて公園になって現在に到っているということである。皿池が溜池として地域に水を供給している頃が、先に述べた深江南地域に流れる「春の小川」の景色を提供していた頃である。皿池からの灌漑用水路の幅は一筋にも満たず深さも三〇センチくらいであった。

皿池の南西角に水門があった。一年か二年ごとにこの水門が開かれる。池の水面は大きく下がり池の面積は半分近くになる。地域の人は「池さらい」といっていた。このときには流れ出る水とともに多くの魚や生き物たちも池に接続する小川に流れ出た。子どもたちが「春の小川」でメダカやフナやドジョウを取っていたのは、皿池から流れ出たものが小川や水路に住み着いたものである。

「池さらい」の時には、普段入れない池の中央部まで入って子どもたちは泥に足をとられながら網で多くのフナを取った。少し大きな子どもならバケツ半分くらいのフナを取ることができた。筆者の同級生の話では、取ったフナを知人の家に届けて大いに喜ばれたという。残念ながらそのフナの料理方法までは聞かなかつたらしい。

昭和三十年代初め当

時の本庄小学校低学年

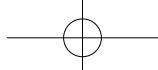
の児童は、初夏には理科の授業の一環として教師に率いられて皿池の周りにやってきた。

しかし池が神戸市に買収され公園として整備される頃には、残っていた田畠にはパラチオンというような殺虫剤が散布された。田畠には赤い布をつけた竹竿が立てられ田に入らないよう警戒されていた。このため田、水路、小川からあつという間に生き物たちは消えた。深江の海岸や砂防堤の周りには、タツノオトシゴが揺らめいているほど水質であったが、水路から流れた汚染水は、浜辺に生活していた生き物も消滅させた。

今日では本庄小学校の理科での授業で、水辺の生き物を知るために



写真6 1960年ごろの「皿池」



電車に乗って住吉川まで行っている。

「栄通」と「すずらん通り」

深江には南北の通りには名前がついていた。深江駅の東側を通る道を稻荷筋、その東の道が札場通、その東が栄通、一番東の道が繁昌通である。地元では稻荷筋を、阪神深江駅より南の一部だけであるが「深江銀座通り」と呼んだ。同様に栄通は別名を「すずらん通り」といた。

この「すずらん通り」について、主に二人の方から聞き取りを行った。一人は昭和二十年生まれで栄通一丁目に成人するまで住んでいた田中平八氏。もう一方は、昭和三十年代半ばに栄通で開業された児島医院の児島哲郎博士である。

「すずらん通り」の名前は、阪神電車道から北に向かって森市場までの栄通の道の両側に「すずらんの花の形」をした街灯が並んでいたことに由来する。道の西側には昭和三十年代の終わり頃まで幾つかの店が並んでいた。貸し本屋・野本呉服店・米穀店・ふとん店・洋服店などである。

通りの東側には国道2号に近いところから順に、芦屋綿業・福原産業貿易があり、阪神電車踏切を南に行くと兵庫伸鉄工業・共同油脂神戸工場。西側には2号に近くに関西自動車という工場があった。この会社は主にトラックの車体を支えるシャーシを作っていた。ちょうど自動車産業が隆盛を迎える時代にあって、非常な活況を呈していた。当時のトラックのシャーシは、現在の金属製ではなく木製であった。工場の中には木材が山積みになっていたという。

昭和三十六年春、このすずらん通りで児島医院が開業した。児島博士は九州熊本総合病院の院長を経てこの地に移ってきた。昭和三十六年四月に国民皆保険制度が発足したことに合わせて開業したのである。当時の初診料は六〇円。往診料が一八〇円。「芸者は呼べねど、医者呼

べる」という戯言が、開業医のうちでささやかれた時代である。児島医院が開業したころ、医院の東側には木造の公営住宅が並んでいた。

栄通は昭和三十三年三月から神戸市によってコンクリート舗装された。「栄東線」として幅員六ないし七尺の市道である。国道2号から南へ深江の町を貫いての舗装工事であった。この頃、深江の主な道は一斉に舗装された（平成二十八年九月五日神戸市建設局取材による）。出来上がった舗装は中央の幅三尺、車一台分の幅だった。道の両側は、いわゆる地道のまま残された。側溝が整備されるのは後のことである。このため雨が降ると中央の舗装部分以外の道は、やたらと水溜りができた。因みに、このコンクリート舗装は国道43号でも同様で、アスファルト舗装となるのはずっと後のことである。深江の道がこのような手法で中央部のみがコンクリートで白く舗装された様子を、地域の人は「フンドシ舗装」と揶揄した。

児島医院が開業した頃、このすずらん通りでは夏の七、八月の七付く日、七、十七、二十七日の三日間に夜店が並んだ。ただ夜店が出た期間は三年ばかりのごく短い期間であった。深江駅前を抜ける稻荷筋が通勤などで賑わった道であるけれど、栄通は森市場を背後に控える深江のもうひとつ賑わいがあつた道である。

◇
取材に協力していただいた方々（敬称略・順不同）

児島医院（深江本町三丁目）・田中平八（昭和二十年生まれ、現・東灘区魚崎本町）・藤本吉江（昭和十年生まれ、現・深江南町一丁目）・西土井敏（昭和十八年生まれ、現・深江南町一丁目）。このほか、多くの方々に聞き取り協力いただきました。末筆ながら御礼申し上げます。本稿は、森口が取材執筆し、深江塾で報告、飯田一雄・松下芳子・増田行雄・大国正美の助言を得て修正し、大国正美が文章を整えたものです。